

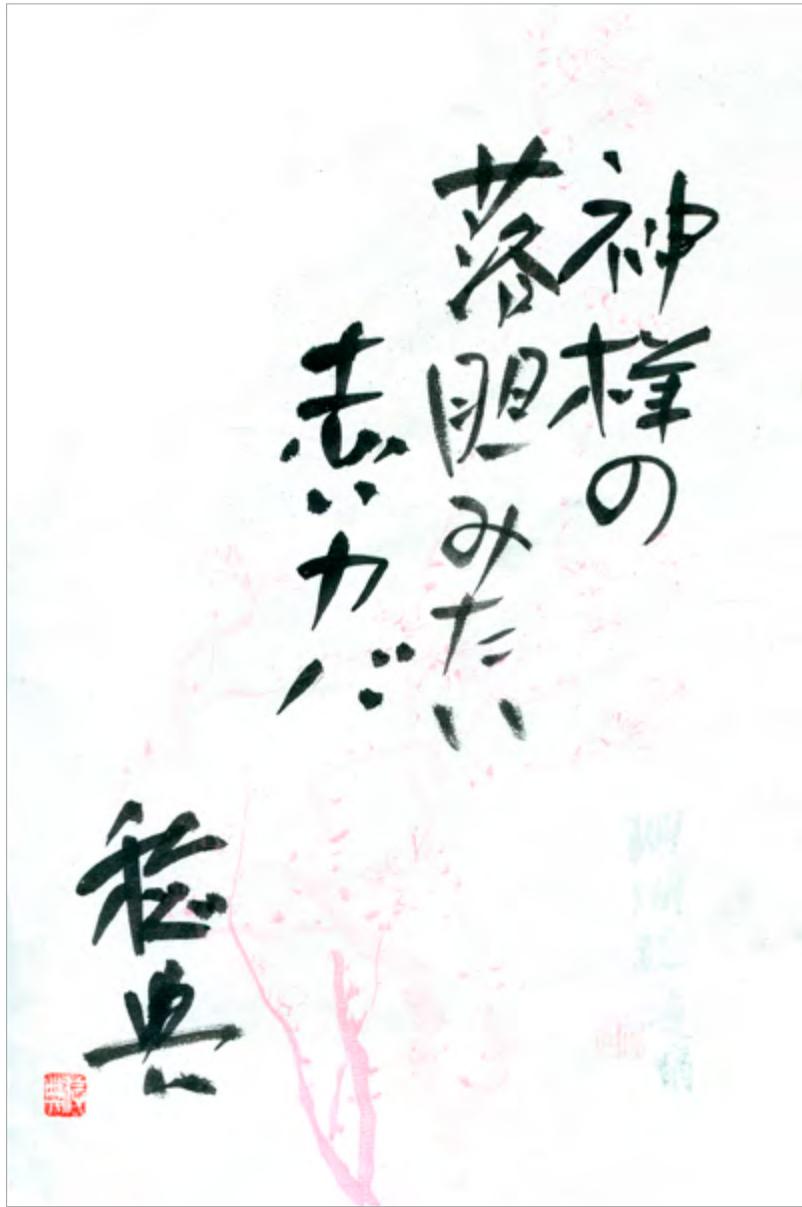
あそ 11

2017



神様の
落胆みた
志カバ

穂典



あそ

十一月



秋風

俎はこんなにも音今年酒
かしぐ時秋の時雨はグレージュに
横棒を一本引きて秋になる
棒買ひに出るには出たがすでに秋
忘れもの届けやうとても秋風

東京

佐藤 喜孝

帰燕

猫ねむり耳だけうごく秋の声
台風の眼に入るビニルハウスかな
木を樵れば山中厄日無事の音
良夜なり賽銭すこし奮発する
帰燕仰いで立ち番の巡査かな

石川

定梶じょう



埼玉

須賀 敏子

喜寿

鹿避けの柵を開いて登山道
忘れものしたやうな日々夏終はる
インパール作戦を知り八月去る
秋暑しゴーヤ次々太りたる
稲夫、忠男さんやかに喜の字の祝ひ秋の色

東京

田中 藤穂

秋暑し

新涼の雨降り出でし銀座駅
区役所の福祉課の窓竹の春
夏過ぎぬなにか大きな忘れ物
磔刑のかたちに醒めて秋暑し
沼へ行く近道は右吾亦紅

三重

長崎 桂子

秋雨

雲走る心の騒ぐ秋の雨
町中は流れとなりし秋豪雨
照降の仲秋の一日友偲ぶ
ハモニカのたどたどしく過ぐ秋の昼
色抜の雲を浮かべる秋の天

東京

森 なほ子

スカイツリー

スカイツリーぽつんと高し秋の昼
スカイツリー祭太鼓の届かざる
スカイツリー眼下にいくつ秋祭
秋澄むや硝子の床に地上見て
東京はビルと大河や鳥渡る



埼玉

山莊 慶子

へブンリーブルー

古伊万里に浮かべし花や籐寝椅子
老いていま良きことも有り夕焼雲
母と子のラジオ体操蟹もみて
朝顔にへブンリーブルーとふ色も
をさな呼び朝顔の種採りてをり

東京

赤座 典子

普請

秋澄みて足場行交ふ影絵かな
養生のラジオ聞えぬ芋嵐
ねえねえと栗剥く吾の膝たたく
四才児「そもそも僕は」と敬老日
旅の靴出番無きまま冬隣

埼玉

秋川 泉

秋の雲

秋の雲父母なき家を流れゆく
無花果の影おとしたる井戸の端
鉄橋の月に臍あり終電車
白桃を好みし母の忌に集ふ
日本を総なめにして大颱風

東京

石森 理和

秋茄子

肌寒し舞台は廻る九十度
秋茄子の味噌汁二杯三杯と
秋の虫人の気配を如何知る
初物や店頭に大粒の栗
蟬時雨箱根を下る救急車



雑詠

愛知 王 岩

大仏や色なき風の過ぐる中
大仏を空澄む中に見上げけり
天高し真直ぐに行く道此処に
秋風を見る度憶ふ故山かな
秋風を又見し旅人朝ぼらけ

秋茄子

埼玉 大日向幸江

赤蜻蛉宵の明星見える頃
秋茄子や残り時間の予定表
鳩サブレペきんと割れて七五三
雨の日のやさしい気持ち暮の秋
虫の音は眠りを誘ふオルゴオル

柿若葉

千葉 黒澤 佳子

切株に生命力や柿若葉
夏風邪に舌舐りの熱の花
江差より届く南瓜や大も小も
垣根越落葉掃き寄せ湿りをり
腸確か朝の目覚めや秋桜

秋の棒

東京 七郎衛門吉保

解散とは籠棒手立て野分立つ
甘柿を見分け蒨蓄ガキ泥棒
夜学生平行棒の夜と昼
秋爽やバトンパス冴え銀メダル
稲架の棒役終え風とじゃんけんぽ



東京

篠田 純子

露坐仏

露坐仏へ造花を供ふ秋の暮
露坐仏と同一歳の木初黄葉
露坐仏拜む秋の蚊を纏ひつつ
野良猫はエサをむさぼる秋の暮
私道なりと通さぬ棒や秋の暮



九月号作品より

秋川泉・森なほ子

目白をば化身と思ふ気弱とよ

佐藤 喜孝

喜孝さんには珍しく?よくわかる句です。毎日庭に来る目白、あれは亡き妻の化身ではないかとふと思われます。そんな自分をなんと気弱なことよと。「気弱さ」を他のことばに置き換え、その気持ちを肯定されたいかがでしよう?そのうち目白は来なくなるでしようが、ひと時の慰めに甘えるのも良いと思うのです。(なほ子)

瑠璃蜥蜴花魁のごと振り返る

七郎衛門吉保

瑠璃蜥蜴とはニホントカゲの幼体尾が青いは幼体のうちだけ。メスは青い色合いが消えるのが遅いとのこと。成体は一樣に茶褐色。幼体は十センチ前後。肌はぬれて光沢があり、背が

黒色で縦筋が走り、尾は鮮やかな青色。このチョロチョロと動くルリトカゲの振り返る様が花魁のようであったとは。あでやかな花魁とルリトカゲが重なって、私もしばし不思議な幻想的な感覚を味わいました。(泉)

自分より朝顔に先水一杯

篠田純子

早朝から太陽がカツと暑い夏の朝。起きぬけにまずコップ一杯の水をゴクリと飲み干すとこころを鉢の朝顔がこの太陽に負けてしまうと急ぎ水やりをした作者。花を愛でる人の植物への思いがこの句から溢れています。そしてご自身も冷たい水を飲まれ、ゆっくと朝顔の花を楽しまれたことでしょう。(泉)

梅筵とり込み目鼻たそがるる

定楳じょう

梅をつけ込みそして天気の良い日を選んでの
天日干し。辺りが暗くなる頃とり込まれた。こ
の日本古来の梅仕事。この句からその豊かな情
緒と季節を感じ、丁寧な暮らしの日々が思われ
ました。(泉)

水無月や洗濯ハサミ劣化せり

須賀 敏子

今までに洗濯ハサミの劣化という日常的現象
を詠んだ俳句があったでしょうか？おまけに水
無月という季語が堂々といっていてこの句のス
ケールを一気に大きくしています。水無月は一
年のちょうど半分という節目の時、宗教的な行
事も色々あって、後ろには暑い夏が控えていま
す。その夏を乗り越えた頃、洗濯ハサミの劣化
は少し進み、人の老化もまた？うまく鑑賞でき

ののでしょうか？(なほ子)

滑り台思はぬ高さ青嵐

森 なほ子

新緑の美しい季節。幼い頃を思つて、ちよつと
上つてみた滑り台。てっぺんに立ったら「あらー、
高いことー！」としばし下をながめる作者。青葉を
吹きぬける風が背中を押してエイ!!と一気に滑り
降りた。「ああー、気持ちよかった!」。(泉)

子を待ちし人に朗報秋近し

赤座 典子

待ちに待った良き知らせ。作者との関係はわ
かりませんが、親しい方なのでしょう。本当に
良かったと、一緒に喜ぶ作者。暑かった夏もも
うすぐ終わり、妊婦さんにも過ごしやすい秋が
近づいています。(なほ子)

わけしらぬ子もくぐりゆく茅の輪かな

秋川 泉

ないので、取り合わせが魅力的な句と思
います。(なほ子)

ぼろぼろの名簿手にあり合歡の花

田中 藤穂

古い名簿。もうぼろぼろですが、名前の一つ
一つが懐かしく、共に過ごした時間や、一人一
人の顔が思い出される大切なもの。もう処分し
ようかと迷いながら、手に取ればまた開いてし
まう作者です。合歡の花の淡いピンクも古い思
い出の色ようです。(なほ子)

山近し並ぶ空き家の青葉闇

長崎 桂子

山のふもとの小さな町か村か、うつそうと茂
る木々に包まれ、点々と並ぶ空き家。このまま
青葉闇の吞まれてしまうのだろうか、と心細い
作者。こんな風景が日本の至る所に見られます
人は都会へと流れ、山里は廃墟となるしかない

恥ずかしながら私も茅の輪はくぐつても詳し
い「わけ」はしらないのです。半年分の積もつ
た穢れや罪を払うための禊のような？なぜ茅の
輪なのかとか、あの廻り方にはどんな意味があ
るのかとか？今度調べてみよう。そうだ、泉さ
んにきいてみよう。来年の六月に。(なほ子)

白桃や肘まで果汁したたらせ

石森 理和

何と美味そうな水蜜桃。ひとつひとつ丁寧に
袋掛けをして育て上げられた白桃。甘露な味わ
いの大玉。とろける果肉。そのなめらかな姿。
高貴な香。本当にこの句の通りの素晴らしさで
すね。(泉)

牛乳を飲んで眠って夏休み

大日向幸江

夏休みの句としては一風変わった句です。ご
自分のことではなくお孫さんでしょうか。あま

前月抄

遺されたか朱雀色なる牡丹の芽 佐藤喜孝

夏草を刈られ外堀急峻なり 篠田純子

コロッケ店日覆深く下ろす頃 定梶じょう

新涼や新幹線の窓明り 須賀敏子

昨夜の雨たっぷり含む葛の崖 田中藤穂

八月尽雲は激しく掻回す 長崎桂子

驟雨聴く山のホテルのトイレット 森なほ子



志

つづら折ミラーを囲む葛の花 赤座典子

特大のふはりととけるかき氷 秋川 泉

惜み鳴く夜昼問わぬ鉦叩 石森理和

苦瓜の四、五本届き思案顔 大日向幸江

水替へて花魁草の濃くなりぬ 黒澤佳子

散歩車の園児のやうに桃並ぶ 七郎衛門吉保





佐藤喜孝

田中 藤穂

窓に置く「夕映え」といふ大林檜
紫蘇の花夫を粗末に扱ひし
虫の声降らせて夜の桜の葉
路細き谷中寺町天の川
木曾谷の空の高きよ鳥兜

路細き谷中寺町天の川

谷中は江戸からの町。表通りと違ひ、生活道路は、その頃とあまり変わってゐないのではないだろうか。一本細い道に入ると初めての人には不思議な世界に迷ひこんだ気がする。廂間の空をあふぐとなんと天の川が見えるではないか。うれしい驚きである。たたみかける調べも

心地よい。

長崎 桂子

晴れ渡り気持清やか小鳥来る
行交ひの車の絶える秋の声
木犀に季節の移る嬉しさよ
常の道コスモスいろに歩は弾む
曼珠沙華敷地ぐるりに真盛り

常の道コスモスいろに歩は弾む

桂子さんの俳句の中にはいつも花や雲や親しい人で溢れてゐる。環境もさうであらうが、心中もいつもさういふもので満たされてゐるのだらう。桂子さんみづからが素晴らしい生活空間を作つてゐる。掲句を読んで、さういへば東京の街を歩いてゐれコスモスに出会つた記憶がない。一二本咲いてゐるのを見過ごしてゐるやもしれぬ。山田線の車窓から眺めてゐると畑の周りをコスモスが囲み、駅埠にはコスモスが溢れてゐたことを思ひ出した。

大日向幸江

折鶴を折つたその手で秋刀魚焼く
稲を干す爺ちゃん大きな手をしてる
穴まどひ何処も彼処も青い空
不良少年残暑の残るコンビニに

稲を干す爺ちゃん大きな手をしてる

爺ちゃんの「大きな手」は働いてきた手である。子どもを育ててきた手である。頼りになる手である。あらためて気のついた爺ちゃんの手である。ありがたい手である。

井上 石動

風蝶花風蝶花色濃く残り風のなか
青空に遜色はなし松虫草
仲秋や隣るお方の甲の皺
通帳へ差し入る風も秋の風
気散じのギターあだ弾く夜長かな

青空に遜色はなし松虫草

庄野英二の『星の牧場』のあらずちを忘れてしまったが、なぜか松虫草が印象的に書かれてゐたように記憶してゐる。それ以後山歩きをしてゐると、松虫草を探す視線になつてゐる。また読んでみやう。掲句は青空と松虫草があるだけの大胆な句。しかしこの句の「遜色なし」に興を覚えた。「青天や白き五弁の梨の花 原石鼎」の写生句とは違ふ方で空と松虫草とを邂逅させてゐる。

篠田 純子

神体は縄文の棒秋あかね
クレゾール散霧の団地曼珠沙華

神体は縄文の棒秋あかね

棒が御神体と。どんな形をしてゐる棒なのだらうか。いや棒とあるからどんな形かとは愚問であつた。土か石で作られてゐるのだらう。いや作つたものではなく自然

石かもしれない。「赤とんぼ」が、句柄を伸びやかにしてゐる。きつと縄文の時を知つてゐる赤とんぼであらう。

石森 理和

茹菓は子等に不人気クミ・キャンデー
秋鮎の卵ぎつしつり青絵皿
干し肉と煎餅。パソコン夜長かな
写メ送信刈田掛稲粉殻焼
彼岸花大屋政子といふ方が

写メ送信刈田掛稲粉殻焼

旅先で出会つた刈田や掛稲や粉殻焼に興を覚え、他の人に知らせたくスマートフォンで写真を撮り、メールといふ手近な手段で知人に送信したといふ句意。わたしは名詞のみの俳句は嫌いではない。がこの句はお知らせだけに終つてゐて残念。刈田や掛稲や粉殻焼を見て触れた感動を言葉で伝えてみたらどうだらう。写メにしても携帯・スマホ・深夜便・道の駅にしても生な言葉で俳句中に生かすには余程の表現力を要する。

須賀 敏子

蔓引けば小さき苦瓜次々と
上野ではゴッホに会へる秋麗
コスモスやパンダを抱いた日もありし
朝ドラに母の故郷の稲田道

朝ドラに母の故郷の稲田道

深夜便・道の駅などの新語はみな句会で教はつた。朝ドラもわたしには新語である。「NHK朝の連続テレビ小説」とでもいふのであらうか。テレビの中に映し出された稲田道を食べるやうに見つめたことであらう。

七郎衛門吉保

「ひよっこ」に自分史重ね九月尽
逝きし友そこでも元氣嚙虫
秋澄みて五官で聴けりモダンジャズ
新米を送りほっこり湯治宿
今年米手にし鼻よす目ききかな

秋澄みて五官で聴けりモダンジャズ

吉保さんとは同年代。遠いむかしにモダンジャズが流行つたことが蘇る。モダンジャズと長たらしく云はないが、詰めていふのも気恥ずかしい。わたしもひそかにあくがれたが、入り口で引き返してしまつた。たつた一枚買ったレコードは「テイクファイブ」。吉保さんはわたしと違ひ五官を動員して聴くほどに浸つたやうだ。秋澄みてが今。モダンジャズが青春。その間を五官をもつて味つてゐるのである。

秋川 泉

もうないか買漁りての西瓜かな
訪ぬれば酔芙蓉はや薄紅に
栗飯をねだる夫が栗をむき
黒々と森せまり来る秋の暮
栗の実や川面にのびる枝の先

栗飯をねだる夫が栗をむき

ねだるを辞書で引くとなかなかゆくわいた。漢字をあてると「強請る」となる。ゆするを引いても「強請る」と同じであつた。「相手の愛情や好意に甘えて、無理にたのむ。せがむ。」とある。掲句に当てはめると夫の顔色なしである。夫君の好物である栗飯を作るのに夫婦力を合せてゐるさまをほほゑましい。

赤座 典子

て・に・を・は・は に押戻される十二夜
花蕎麦や湯宿の足袋に滑り止め
当たり棒大豆と並ぶ道の駅
錦木の翼つきささる玻璃の窓
先見えぬ踏絵の連鎖九月果つ

花蕎麦や湯宿の足袋に滑り止め

蕎麦の花は朝も夕べも遠くとも近くとも印象的である。霞のやうに揺れてゐる蕎麦畑。近寄ると茎の赤さにどきつとする。掲句、掃除の行き届いた宿の廊下、女将の心くばりの足袋。良き旅であつたことがうかがへる。

定樞じょう

九時打つと針が直角残暑の候
銀やんま己れを高む瀉に出て
零余子摘むやむかし或るところに
月の出や送電線がじゃまでじゃまで
嬰のつくる拳固新ちぢりに負けじ

零余子摘むやむかし或るところに

べつにとりたてて美味しいわけではないが零余子飯は
わたしたちの間では特別なメニューだった。道の辺で零
余子を見つけるとつひ手が出てしまふ。函館でも立派な
零余子を見つけ持って帰った。

むかしプランターに長芋の食べ残しを植えたら以後毎
年実を付けてくれる。今年もひと抓みの収穫があった。
むかしむかし高島茂が零余子飯を作り持って来てくれた
以後、わが家のかかせないメニューになった。今年も故
人をしのんで食した。

掲句の「むかしむかしあるところに」はなつかしい昔

嘶の出だし。どんな嘶が始まるのだろうか。茫洋とした
とらへ処のない句にみえるが、「零余子摘む」が良い塩
加減で惹きつけられた。何回も読む、滋味が尽きない。



佐藤喜孝 著

青宮烏丸

を讀む
五

8月のなかごろはまた暑かりし

一九四一年十二月に始めた戦争も一九四五年八月十五
日に終戦をやっと迎えることが出来た。この日を迎える
までの国民の大部分の人たちは並大抵のことではなかつ
たと思う。開戦二ヶ月前に生れた私は、戦争の記憶はな
い。私に戦争の記憶がないということは、学校へ行くよ
うになり興味を持った事柄を勉強していくうちに、庶民
の暮しがどんなに大変だったかがわかった。警戒警報で
逃回らなくてよく、黒い布を電球にかぶせなくてもよく
なった。このことだけでもどんなにか楽になったことだ

佐藤 恭子



ろうと思う。しかしこれからが大変。作者は終戦を東京
で迎えたという。本当に大変だったことであつたらう。
八月十五日（中頃である）本当に厄介な暑さである。何
時の世も命令されている庶民はババを引いている。余談
だが吟行の途中に立寄った「無言館」ここには戦争を知
ることが出来るところの一つであるが、思いっきり打ち
のめされた。或る写真のコメント、『庄屋の息子で戦争
に行かなくても済んだのに』……。人の目につくと
ころにこんな傲慢なコメント。何時の時代も同じ今も
……。

鳥渡るセイタカアワダチサウ速し

セイタカアワダチソウはキク科の多年草で別名セイタカアキノキリン草と言われる。北米原産の帰化植物である。二、三年前頃まではよく小さな空き地にでも（大きいところは勿論）背を競って咲いていたものを目にしたものである。いつの間にかあまり目にしなくなつた。二十年前この句集『青寫眞』が出来た頃は、本当に至るところで見たものだ。あつという間に日本中に散つて咲いた。花粉症の原因かとも云われたが、今では否定されている。瞬きをしている間に、外つ国からの贈り物が日本国中を駆け巡つてしまった。本当に「速し」で、全くその通りである。

それに鳥渡ると言う季語、越冬するために日本に来て春になると北の国へ帰るもの。そのまま日本に定着し気化してしまつた草との取り合わせ。両方とも動きがあるが、動きの中に静と動に分かれていて、両方ともに良く生かされている。

月明し歩けさうなる水の上

月の明るい夜、池湖などに行くと昼間と違つた水面に

映る光景が見られる。

昼間は明るいので、これは様々の景色が映つてそのときどきの色も目にでき遠近、色彩が愉しむことが出来る。ところがこれ夜になつてしまうと様子が一変してしまふ。周りが暗くなつたせいで閉塞感が生まれ、水面に映つている物が映つている物でなく、現実にはそこにあるように思われてくる。

草や花がずっとむこうまで咲き続けているように錯覚させられてしまふ。すると足が前に出てしまふようだ。

夜は怖い！月もときには怖い。引き込まれそうになるような気がするときがあるから。

バイバイの手付で蝶の枯れてゆく

赤ん坊が最初に覚える言葉は、ウマウマ・ママ・パパから始まつたように記憶している。次に身近にいる動物猫・犬をニャンニャン・ワンワンと言えるようになる。

だんだん語彙が多くなつてくると、挨拶の言葉が言えるようになる。バイバイもその内のひとつである。憶えたものを使つてみると、周りのみんなが喜ぶ。すると何

にでもバイバイと言うようになる。

てのひらを指のところで曲げて小さい子供がバイバイをしているのは可愛いものである。うまく手付きが動かないでいる方が一段と可愛い。

蝶々がバイバイを出来る筈もないが、蝶の羽根の動き方がバイバイをしているようだと言われてみればたしかにその様だ。

「バイバイの手付」と断定したところが何とも言えず妙である。

広辞苑によると手付きとは手を使って事をするときの手の格好や動かし方とある。「手」は持ち合わせていない蝶はかわりに羽根がある。蝶の枯れゆく様は残念ながら見たことはない。バイバイの手付きと言われるものなども可愛らしい最後を思つてしまふ。最後はなにものにとつても綺麗なものではないが、この場合は違ふ。

優雅に舞つていた蝶の最後に相応しいのかもしれない。

秋のチーズなかにばい刃のどまむね

私の子供の頃には、私の家ではと言つた方がいいのだ

ろう、チーズなど口にしたこともなければ見たこともない。子供の頃過ごした三春や新潟でも町中で見たという記憶がない。チーズという言葉さえも知らなかつた。今は違ふ、子供用のチーズである。

この句は秋のチーズは、まん中辺りで刃がとつまつてしまふと言つている。春でも夏でもない、秋だから止まるのだ。温度が低くなつてチーズが固くなつたからと言つてしまつたら其れまでであるが、どの家庭にも今は冷蔵庫があるのでそう言うことでもあるまい。

秋のチーズには某かの意志を感じたのであろう。流れに逆らうものの声が、ナイフを持つ手に敏感に反応した。

八月十五日も秋である。
最近次の句を読んだ。

刃を入れて拒む手ごたえ青林檎

狩行

坊に寝て松風を聞く良夜かな
 啄木鳥のつきのほりてかかれな
 石人に野菊の径の生せてあり
 燈臺の下に家ある碓かな
 尼寺やこりこりこりと書石
 見届けし亭すまびる徳草かな
 支那の青丹の障子洗ひけり
 神の池借りて障子を洗ひけり

人の灯に踏いて汚れる紅葉かな
 神登ちしばかりの宮に詣りけり
 道へのや虫がら空き此落葉龍
 時雨ふるや僧がさしゆく廓傘
 火の山の或日静かに眠りけり
 願て灯なかりし枯野かな
 落葉搔く音近きし屏風かな
 同病をあはれみ合へる火針かな

蜂の巢のものしくも焼かれたる
 桑海の露うつくしき飼屋かな
 夕方の月のよろしき蛙かな
 セルを着て三橋郎忌近きぬ
 身にあまるもてなしにあり新樹宿
 芽も減り殺象蟲も減りけり
 つかれ鶴のただひびきてさびけり
 松の葉のま落ちて静かや蟻地獄

枝庭やけふの旗日の草干せる
 彩簾朝日夕日にかけ流し
 道埃あがりて失せぬ瑠璃猫
 憩ひて籠の道連れ増えたり
 四羅の肌玲瓏とふ動きたる
 一夜會草端居重おて嘆きたり
 松風に吹かれてうまき飯湯かな
 水中花開ける泡を放ちけり

寺裏見えて遠き野菊かな
 落葉や鱗もち乾く潦
 落葉して掃き落葉して掃きけり
 時雨ふるや搔けば父ありし丈鉢
 温突の二窓の一つ塞あり
 風邪にも弱るおのれとなりしか
 病根を知りて女もや日向ほこ
 北風やまちな向き給ふ石俤

燭かへて涅槃明るくおはしけり
 延命が干すもの貧しき木立かな
 垣外に波のあらぶる挿木かな
 彩閣をめぐりめぐりて青き踏む
 句筵や四月三日の山頂に
 本蓮の風を重おて葎りにけり
 花喧嘩してより彼と交はりぬ
 蜂出でて此落したる葉をさ守りけり

冷蔵庫開きて何もなかりけり
 水論やわがことばかり言ふ聲耳
 水論のとはちり持つて来りけり
 山茶屋に古き借ある野菊かな
 毎日や泣顔に打つ天風粉
 大勢に隣りて一人墓を掃く
 流燈ややうやくぬけし船棹
 長き夜の膝に閉ぢたる取巻かな

雪空やかかるところに虎おとしけり
 巢籠れる鶴のたちしと人たかり
 屋根の上に堤横たふ出水かな
 微の香や探してあてたる去来抄
 花葉産に葉影おびて涼しけれ
 一行に足らぬ床几や氷水
 あちこちに盗らるる水や濁り鮒
 祈雨篝うつれる水を守りけり

あとがき

正式な番組名は忘れたが録画したゴッホを見た。「花咲くアーモンドの木の枝」といふ一見青空に広がった枝に桜の花が咲いてゐるやうな絵と『ゴッホから弟テオへ』の手紙の一部が印象的であった。メモしておいたので、

彼は何をして時を過ごすのか。地球と月の距離を研究しているのか、違う。彼が研究するのはたった一本の草の芽だ。しかしこの一本の草の芽がやがて彼にありとあらゆる植物を、ついで四季を、風景の大きな景観を、最後に動物そして人物像を描写させることになる。全て描くには人生はあまりに短い。そう、これこそかくも単純であったかも自分自身が花であるかのように自然の中に生きる。これらの日本人がわれわれに教えてくれることこそ新しい宗教ではないか。

わが家の猫は夜帰宅すると暗い玄関さきで待っている。わたしを確認して自分の居場所に戻る。

初めはわたしを待つてゐるのだと思った。しかしある時、わたしが家に居てもさうしてゐることに気がついた。本当の飼い主を待つてゐるらしい。わが家の忠猫アリのこの行動はいつまで続くのか。本当は外の世界が気になってゐるだけかも知れない。とはおもふのだが。

前号正誤

11頁 石森理和↓七郎衛門吉保

(喜孝)

二〇一七年十一月号

発行日 十一月三十日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

他銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)